もりや仙一郎県政報告

Vol.114

山形県

小さな赤ちゃん 育児に寄り添う

リトルベビーハンドブック作成へ

子ども政策の原点は出生から始まります。

山形県の令和2年度出生数は6219人で、このうち2500g以下で生まれた「低出生体重児」は566人、全体の約9・1%を占めます。その中から手厚い医療を必要とする1500g以下で生まれた「極低出生体重児」は47人いました。

今年4月、低出生体重児を持つ母親などで組織する支援団体から私に連絡があり、小さな赤ちゃんのための母子手帳「リトルベビーハンドブック」の作成要望を受けました。同ハンドブックは通常の母子手帳に該当しない低体重で生まれた赤ちゃんのための母子手帳で、身長、体重を示す発育の曲線グラフが改良されています。

国際母子手帳委員会事務局長の坂東あけみさん（左）と医師の渡邉眞史さん（右）にリトルベビーハンドブックについて話を聞いた

山形市選出の伊藤かおり議員（右）が同ハンドブックについて一般質問した

低出生体重児を持つ母子手帳を使用すると、掲載されている月齢の成長と乖離（かいり）があるため、精神上落ちこんだり、母子手帳へ興味を失ってしまったりする恐れがあることから、全国で同ハンドブックの利用が拡大しています。ページをめくると、日々の赤ちゃんの状態、成長を書き込む欄のほか、低出生体重児に特化した情報などが掲載されています。懸命に生きるお子さんの成長記録をしっかりと残したいという親の想いが詰まったハンドブックでした。

今回、ハンドブック作成要望を受け、すぐに県の担当機関「しあわせ子ども応援部」に掛け合い、その必要性を訴えました。

そして、6月議会では山形市選出の伊藤かおり議員が同ハンドブックに関する一般質問を行い、県のしあわせ子育て応援部長は「母子に対して直接支援を行う市町村や、保護者の団体つばさっ子リトルベビーサークル、小児医療の専門医師などの意見を丁寧に聞きながら、ハンドブックの作成に向けて対応する」と回答をいただきました。

これにより、まず低出生体重児を持つ母親の訴えが届きました。今後、9月議会の補正に向けて情報収集し、山形県に生まれる子どもたちの応援をしていります。

天童市蔵増地内を流れる樽川の排水樋門が完成

雨災害、未然に防ぐ

県内で河川治水対策進む

今年6月28日18時45分、天童市に大雨洪水警報が発令されました。19時3分に土砂災害警戒情報発令、19時10分に天童市東部地区の若松、荒井原、川原子、谷地中、田麦野に「高齢者避難」発令と短時間の大雨に対する警戒情報がテレビ、スマートフォンで流れました。国土交通省のアメダスによれば、連続雨量が130ミリとなり、市内の局所で豪雨となりました。このようなことが、予測もつかないまま起こる状況です。

天童市内では今年3月、蔵増地内を流れる樽川の排水樋門が完成しました。また、倉津川、乱川などで堤防の嵩上げ、河床整正などを行っております。今後も、安心できる河川の治水対策予算獲得に頑張ってまいります。

7月には、毎年行っている津山地区河川調査会を開催しました。この事業も長く行っています。こういったことが、河川環境を把握するうえでは大変重要です。

天童市を流れる倉津川、乱川などで堤防の嵩上げ＝倉津川（天童駅西）

高齢者の農作業事故が増加

農業従事者の高齢化で農作業中の事故が増加しております。

7月27日現在で農作業事故で救急搬送された人数は天童市で11人、東根市で14人でした。大半が脚立からの落下です。

また、サクランボ雨よけハウスでの高所作業中の落下事故もあります。今年は東根市で、サクランボ雨よけハウスから落下し、亡くなってしまう痛ましい事故も発生しました。

農作業事故を起こす年代のおよそ7割が65歳以上の高齢者です。長年、農業をやってきて、人生後半に事故に遭ってしまうことは、大変残念なことであります。

安全な雨よけハウスとは

農業の担い手、後継者不足で、耕作放棄地が県内で増加しております。

一番多い耕作放棄地の樹種は山形県特産の「サクランボ」です。要因としては「雨よけハウス」の維持が困難になっていることが上げられます。

4～5メートル程の高さのハウスを雨よけシートで覆う作業は、高齢になると危険であり、作業自体が困難になります。また、樹木自体も高さがあるため、収穫や手入れも難しくなります。

耕作放棄地の進行を食い止めるために、農業の担い手確保が喫緊の課題ですが、農家では年を重ねるごとに、どんどん人材確保が難しくなっていく問題があります。

以上の要因からサクランボ栽培をあきらめる農家が年々、増えております。

これらは以前から議論になっていますが、先に進んでおりません。私も、農業資材関係者や園芸農業研究場などと議論を重ね、これからの安全な雨よけハウスのあり方を探ってまいりたいと思います。

やまがた紅王 佐藤錦と差別化戦略

今年は、山形県期待のサクランボ新品種「やまがた紅王」が本格デビューの年となりました。この品種は「大玉」で「かたい」という特性を生かし、贈答向きと言えます。今後、県は栽培面積を増やす考えで、軟化しやすい佐藤錦と差別化したマーケティング戦略が必要になります。

ただ、これまでの農家の現場では佐藤錦を多く販売してきましたので、そう簡単に紅王への移行は難しい状況です。今後２、３年は選択しながら栽培、販売になると思います。デビューを振り返ると県のＰＲが先行しており、消費者の方にはなかなか届きづらく、どのようなものか食べてみたいという期待が大きかったのではないでしょうか。道の駅などでの直販はとても人気があったと伺っております。

もりや仙一郎事務所

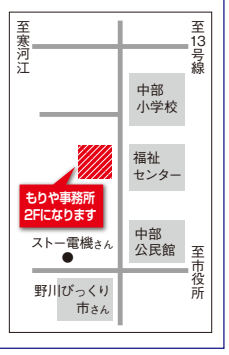
ご意見を募集しております。FAX・メール・ブログで頂けると幸いです。
こうして欲しい！ ココが問題！ 改善して欲しい…など

☎023-651-5539 FAX023-651-5549

〒994-0013 天童市老野森３丁目 4-17

もりや仙一郎 検索

過去の県政報告はHPでご覧いただけます。 https://www.10016.jp/

facebook 友達登録をお願い致します。

公式ホームページ